

高校野球と沖縄 『熱闘 高校野球 本気の夏100回目』展より

外間一先

The Commemorative 100th National high school baseball Championship

Kazuyuki HOKAMA

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第12号別刷

2019年3月29日

Reprinted from the

Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.12

March, 2019

高校野球と沖縄 『熱闘 高校野球 本気の夏100回目』展より

外間一先¹⁾

The Commemorative 100th National high school baseball Championship

Kazuyuki HOKAMA

Abstract

Summer 2018 commemorate 100th times National High School Baseball Championship.
It also marks the 60th anniversary Okinawa high school participates in the event.

The Okinawa Prefecture Museum holds the exhibition on the history of Okinawa's participation on the said event 55days permanent exhibition , starting on June 5th until July29th.

This is to acknowledge the greatest milestone in history of National High School baseball team in Okinawa. The purpose of this exhibition is to encourage High school baseball team with opportunities to review the figure of society of the Okinawa prefecture , and also Personal nostalgia.

はじめに

毎年、阪神甲子園球場で開催される全国高等学校野球選手権大会は、「夏の甲子園」とも呼ばれ、日本の夏の風物詩といわれるほどの一大イベントである。なかでも沖縄は、高校野球の熱狂的な県民があふれている場所といえるだろう。テレビで野球中継が始まると仕事は中断し、市場では私設応援団が結成され、自動車の交通量は激減するという状況である。弱小だった県代表校は九州や全国大会で大敗を喫するが、徐々に力を付け一つずつ勝利を重ねる姿に県民は励まされ勇気づけられた。それはまさに戦後復興と重ね合わせるような出来事であり、政治、経済、教育、インフラ整備など様々な分野で日本本土との格差是正を象徴するものであった。

そして2018年夏は、第100回全国高等学校野球選手権記念大会となり、また沖縄県勢の初出場から60年を迎える節目の大会となった。同大会のキャッチフレーズは「本気の夏、100回目。」

夏の甲子園が100回を迎えるという節目にあた

り、本県の高校野球の歴史をテーマに当館の常設展歴史部門展示室において6月5日(火)から7月29日(日)まで55日間の日程でトピック展を開催した。高校野球の資料を通して県民の姿や世相を振り返ることを目的とし、高校野球の感動を呼び覚ます機会となる展示内容とした。

1. 沖縄への野球伝来について

沖縄県高等学校野球連盟が1972年に発刊した『沖縄県高校野球五十年史』には、日本や沖縄への野球伝来について次のように記録されている。

「ベースボールが日本に紹介されたのは、1873(明治6)年といわれています。当時、神田一ツ橋にあった開成学校(現在の東京大学の前身)のアメリカ人教師ウィルソンが学生に教えたのがはじまりだといわれています。めずらしさも手伝ってベースボール競技はたちまち学生の間で流行しました。最初は、たんなるボール投げか、ソフトボールを簡略化したものだったのですが、1876(明治9)年になり、

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

日本人の平岡^{ヒロシ}氏がベースボールをじっくり研究して、日本初のベースボールチームを結成しました。1894（明治27）年には『野球』という言葉が登場しています。初めてベースボールを『野球』と日本語に訳したのは、第一高等中学校（後の東京大学教養学部になる）の野球部員であった中馬庚だといわれています。1894年（明治27年）、彼らが卒業するにあたって部史を刊行することになり、中馬の書いた文章中に『野球』が登場するということです。ちなみに明治期の俳人で有名な正岡子規は、バッターを打者、ランナーを走者、デッドボールを死球、フライを飛球と呼び、これは現在でも使われている用語です。

さて、沖縄に野球が渡来したのは、ベースボールが『野球』と訳された同年の1894年です。当時、沖縄中学（現：首里高校）の生徒らが本土修学旅行の際に、京都の第三高等学校（現：京都大学）を見学。その時に野球と出会い、三高の学生からいろいろと野球の説明を受け、野球用具をみやげに持ち帰ったことが沖縄野球のスタートにあたります。

当時の沖縄中学は運動場が大変狭かったので真和志大道の練兵場（現：栄町付近）で好きなグループが2チームに分かれて遊んでいたそうです。その年の秋の運動会が瀧原（カタバル：昔の塩田で現在の前島町一帯）で催されたときに紅白戦をやってみせたのが公開試合の第1号といわれています。」¹⁾

伝来後、沖縄本島内で紅白試合を行う日々が続いていたが、1903（明治36）年に、初の対外試合の機会が訪れる。米国海軍練習艦ピッツバーグ号が那覇港に寄港し、首里城を見学した。その水兵たちが沖縄中学の野球練習を見て、県を通じて試合を申し込んだのである。前出の『沖縄県高校野球五十年史』には当時の状況について、数多くのエピソードを紹介している。例えば①内野ゴロを打った打者が1塁を駆け抜けてもいいことに驚いたこと②内野手のグラブを初めて見たこと③投手と捕手のバッテリー間でサイン交換することを初めて見たこと④米水兵が素手でプレーする沖縄中学の選手に驚いたことなどである。当時県知事であった奈良原繁が観戦し、選手を励まし、水兵達にはビールを振る舞ったことなど興味深い逸話が取りあげられている。

紅白試合程度が続いた学生野球は1910（明治43）



写真1 美津濃グラブ（個人蔵）昭和初期頃

年に、沖縄中学から県立一中（現・首里高校）と二中（現・那覇高校）に分かれることから変化が起きる。両校は学問とスポーツに切磋琢磨し合うようになり、1914（大正3）年に対抗試合を開催するようになったのである。県内学生野球大会の始まりである。ただ、この時点では、あくまでも県内大会の範囲にとどまっていた。

初めて沖縄県代表が全国大会予選に出場したのは1922（大正11）年のことである。県立一中と那覇商業の二校が全国中学校野球第8回大会九州予選（現在の高校野球）に出場した。両校とも2回戦からの登場。県立一中は1-0で佐賀商業に勝利し、那覇商業も6-1で長崎師範に勝利している。両校は3回戦で敗退したが、その前年には県立一中が鹿児島県の大会に招待され、見事3戦全勝を挙げて優勝している。こうした県勢の活躍は、野球が沖縄に定着する大きな契機となった。『沖縄県高校野球五十年史』には「刺激の少ない沖縄代表の初の本土遠征としては好成績だったというべきであろう」とある。

2. 戦前の沖縄学生野球について

初参加の大会でいきなり初勝利を挙げた県勢は幸先のいいスタートであった。しかし、その後は九州勢の前に圧倒される状況が続く。翌年第9回大会九州予選には県立二中が参加。緒戦0-8で佐賀中に敗戦。1923（大正12）年から1927（昭和2）年までは県内大会は行われたが、「学校当局や父兄の理解が得られず」²⁾九州予選への参加は見送られている。次の参加は1928（昭和3）年の第14回大会

の南九州予選に出場した県立一中であるが、0-5で鹿児島実業の前に敗退している。以後の戦績は次の通りである。

1930 (昭和5) 年 第16回大会南九州予選
●1回戦：県立二中5-8中津中
1931 (昭和6) 年 第17回大会南九州予選
○1回戦：県立一中10-4八代中
●2回戦：県立一中2-8熊本師範
1932年 (昭和7) 年 第18回大会南九州予選
●1回戦：沖縄水産2-28大分商
※第18回大会から沖縄が正式加盟県となる。朝日新聞社からの補助金を県代表校の遠征基金にあてた。 ³⁾
1933 (昭和8) 年 第19回大会
●1回戦：県立一中2-25鹿児島商
1934 (昭和9) 年 第20回大会
●1回戦：沖縄水産1-16熊本工
1935 (昭和10) 年 第21回大会
●1回戦：県立一中1-16熊本商
1936 (昭和11) 年 第22回大会
●1回戦：那覇商業0-17熊本工
1937 (昭和12) 年 第23回大会
●1回戦：県立二中3-4熊本商
1938 (昭和13) 年 第24回大会
●1回戦：沖縄水産0-25大分商
1939 (昭和14) 年 第25回大会
●1回戦：沖縄水産6-8鹿児島一中
1940 (昭和15) 年 第26回大会
●1回戦：沖縄水産0-31熊本商
※○は勝 ●は敗 『沖縄県高校野球50年史』より

当時の状況について、元沖縄タイムス運動部記者で沖縄社会人野球連盟の会長も務めた国場幸輝氏(1911～1989年)は次のように語っている。「(本土との親善試合では)全盛時代の一中でも歯が立たなかった。(県外チームの捕手が)打者走者とともに一塁カバーに走って観衆をびっくりさせた。捕手は一塁カバーにもまわらなければいけないことは話しに聞いていたが実際に見たのははじめてで非常に勉強になったことを覚えている。」という野球レベルであった。他にも「当時は審判員もルールにくわ

しい人が少なく(中略)手さぐりで勉強した」ことや試合会場だった那覇市奥武山野球場が「外野後方が海だった。当時は投手マウンドもなく、バックネットもなくただの広っぱでおそまつなモノだった」という。⁴⁾ 野球の技術やルール、野球場施設など様々な面で沖縄の野球は九州のレベルから大きな遅れをとっていたのである。

3. 沖縄野球の父 国場幸輝氏について

ここで国場幸輝(1911～89)氏と飛田穂洲(1886～1965)氏を紹介する。国場氏は遅れをとっていた沖縄野球のレベルアップに大きく貢献した人物である。戦前から戦後を通じて、日本本土と交流を深め、指導者や選手らの強化に努めた。沖縄県野球連盟会長や沖縄タイムス運動部長を務め、沖縄野球の父とも呼ばれる。沖縄での高校野球連盟設立にも尽力し、本土の高校を招くなど、積極的に野球交流を進めた人物である。

国場氏は県立二中で野球を始め、投手でプレー。卒業後、郵便局員のかたわら母校の監督に就任した。沖縄の野球のレベルを上げようと、早稲田大学の監督を務め「学生野球の父」と呼ばれた飛田穂洲と文通し、ルールや技術を学んだ。36年夏、飛田氏に招かれ、教え子と甲子園の試合を観戦している。大観衆に圧倒され「めぎすところは甲子園だ」と言うようになった。⁵⁾

飛田氏は『一球入魂』という言葉を作った人物であり、「敗れて泣くな、練習に泣け」と唱え野球に「武士道」の精神を取り入れた「無私道」を説いた。それは勝敗だけにとらわれず、野球を通して人間性を高めることが正しいことだと断言していたのである。国場氏は、この「無私道」に感銘を受け、野球のルールや技術、指導法について飛田氏に手紙を出して相談していた。国場氏は次のように話している。「私は昭和六年、はじめて東京の朝日新聞社運動部気付けで飛田先生にお手紙を差し上げ、練習方法や野球ルールの疑問点についていろいろとお尋ねしたところ毛筆で大へんていねいな候文でしたためたご返事をいただいた(中略)昭和四十一年一月にお亡くなりになるまで特別にかわいがってもらった」⁶⁾ 国場氏が飛田氏からいただいた書が2点残っている。(写真2, 3)

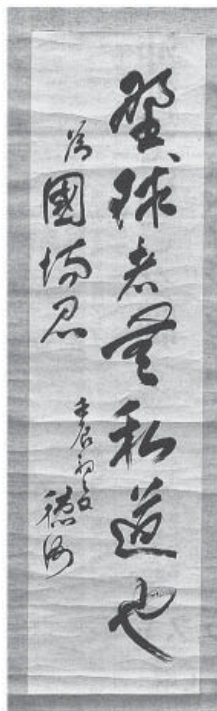


写真2 『野球者無私道也』
(個人蔵)

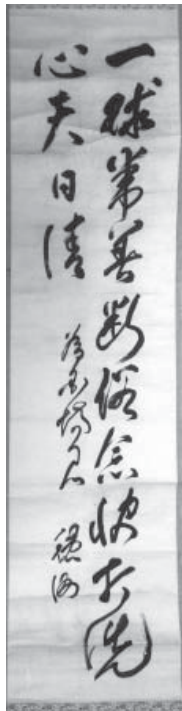


写真3 『一球常善』
(個人蔵)

飛田氏との交流を深め、野球を学んだ国場氏が率いた学校が県立二中であった。同校は1937年第23回大会で破れはしたものの熊本商と接戦を演じている。また1941(昭和16)年、沖縄の念願であった地元開催である第27回大会の出場も決定していた。投手の仲村渠栄儀氏はハワイ移民から帰沖した選手であり、経験豊富な速球派タイプであった。投攻守三拍子そろった二中は他校を寄せつけず沖縄予選では大差で勝ち、南九州予選は、地元開催ということもあって並々ならぬ決意を持っていた。

しかし、残念ながら、この年に大会は戦争のため中止となっている。大会まであと1週間という直前の「中止令」であった。主催する朝日新聞社に「全国的競技会禁止」の文部省通達の知らせが入ったのである。⁷⁾ 沖縄での南九州大会開催に向けて、当時の那覇市長中間重剛氏と朝日新聞那覇支局長豊平良顕氏が主催者と交渉し、会場となる奥武山グラウンドを改修工事した。マウンドやバックネット、スコアボードを多くの人で準備していただいただけに選手及び関係者を落胆させる中止であった。もし開催されていたら、沖縄からの全国大会初出場は、戦前の県立二中であった可能性も否定できない幻の大会であっ

た。

1942(昭和17)年に中学野球の主催者が朝日新聞社から文部省学徒体育振興会主催にうつる。一中、二中、商業の三校でリーグ戦を開催。三校とも1勝1敗で並んだが、決勝戦は行われず中止となる。これが戦前最後の中学野球大会となる。

1944(昭和19)年に那覇十・十空襲で那覇市の大半が焼失し、翌年4月、沖縄は第二次世界大戦の戦場と化していくのである。

4. 戦後復興期の沖縄野球

国場氏は、戦中兵役は免れたが、戦後は名護市の収容所での生活を強いられた。ある日、キャッチボールをしている米兵にグラブを借り、下手投げを披露した。本格的な投げ方に驚く米兵に、英語で言った。「ベーブ・ルースを知っているよ」。これがきっかけで米兵と打ち解け、収容所と米兵と一緒に野球をするようになったという。46年糸満市に移り、社会人チームに加入。現在のうるま市の米軍部隊まで試合しに行くこともあった。⁸⁾

戦後、沖縄の高校野球の再スタートは1946(昭和21)年9月である。沖縄体育協会及び文教部文化部共同主催で第1回全島高等学校野球大会が石川市城前初校グラウンドで行われた。スポーツを生活に織り込むことで、心身を弾力あるものとなし、また建設途上にあつて人々は萎縮や小競り合いがある中でスポーツを通じて明朗な融和と社交を期待するものであった。当時の様子を1946年10月18日付『うるま新報』では、次のように報じている。「ハイスクールの試合はすこぶる低調で、プレイも粗雑であり、頭腦的エラーが多く乱戦であった。練習期間がなかった故でもあろうがプレイの中に学生のもつ活気さも欠けていた。僅かに前原対糸満戦が技術的にも見るべきものがあつたがこれも内野の凡失により勝つべきゲームを失う等芳ばしからぬものであった」。試合の内容は「無統制なボール遊び」のようなものであったが、同じ頃、行政組織として各群島に民政府が設置された時期であり、復興へと歩みを進めていく中で開催された記念すべき第1回大会であった。

同大会の様子について沖縄県高校野球五十年史には次のような記録が残っている。

「第2次世界大戦最後の戦場となった沖縄戦で、家・財産を失って命からがらやっと生き残った住民にとっては、第1回野球大会が開催された1946年9月といえども、未だ戦災の傷あとも生々しく、日々の生活を送るのに齷齪していた時期であった」「衣食住に事欠く当時、野球のみならず、スポーツ全般の悩みは、用具が手に入らないということであった。戦時中、敵性スポーツであるとの理由で日本軍部は野球を非難・廃止したが、上陸してきたアメリカ軍は、さすが野球を国技とする国だけあって、戦場にも野球用具を持ち込んできた」「第1回野球大会はソフト・ボールを用いて行われた」「グラブ・ミット・バットやボール等はどうにかこうにか取り揃えることは出来たにしても、着のみ着のまま衣服が極度に欠乏していた当時、ユニフォームは米軍服のHBTを作り直したものか、或いはメリケン袋等で間に合わせ式に、どうにか野球のユニフォームらしくととのえたものを着けて打球を追い、ホームにすべりこんだりした」。

また、戦後の野球について国場氏は「終戦直後、敗戦で打ちひしがれた人々に明るさを与えたのは野球であった。何の娯楽もない時で米軍から払い下げられたソフトボールの用具一式で羽地、石川、宜野座のキャンプで各班対抗の野球が興った。日本や南洋群島、台湾、支那、満州あたりから復員してきたかつての野球人たちによって各地にチームが結成され、地区対抗野球が誕生した」と述べている。さらに石灰が手に入らず、強力殺虫剤のDDTでラインを引いたり、配給品のおこぼれであるメリケン粉を活用したというエピソードも添えている。⁹⁾



写真4 優勝旗（那覇市教育委員会 蔵）

戦後、廃墟の中からの出発であった沖縄では、多くの人々は捕虜収容所での生活を営み、米軍支配のもと食料品や衣類の配給はあるものの戦災による慢性的な食糧不足から、病気や栄養失調で亡くなる人も少なくなかった。やがて人々は収容所から旧居住地へ帰ることが許され、苦しい苛酷な日々の中にあつて、生活の復興に取り組んでいく。そのような時期に「ブルドーザーでガーッと整地をして広場を造り」人々は「各チームの応援団も応援に詰め掛け、試合に熱狂した」。選手や大会運営も「手探り状態での沖縄高校野球の夜明けだった」。¹⁰⁾ 当時の優勝旗は、米軍が使っていた寝袋やパラシュートを材料に、マラリアの薬を使って色を染めたものである。（写真4）何もない時代に選手を喜ばそうと国場氏の発案で作られたものだった。

<戦後、沖縄高校野球のあゆみ その1>

『沖縄県高校野球五十年史』より抜粋

第1回全島高等学校野球大会

1946年9月28日～29日

出場校：9チーム

糸満・田井等・石川・前原・外語・知念・胡差・首里・宜野座（優勝は首里高校）

第2回全島高等学校野球大会

1947年6月22日～28日

（会場）石川高校及び城前初等学校

出場校11チーム（高校）

外語・糸満・石川・文教・首里・田井等（現名護）・中農・知念・宜野座・前原・コザ（優勝は糸満高校）

第3回全島高等学校野球中央大会

1948年7月8日

（会場）知念村親ヶ原の知念高校校庭

同大会から地区予選を設定。各地区の優勝チーム4校が中央大会に出場した。

北部地区：田井等（現名護）高校

中部地区：石川高校、コザ高校

南部地区：糸満高校

（優勝は糸満高校）

第4回全島高等学校野球中央大会

1949年6月10日（会場）首里高校及び城岳球場

北部地区：名護高校

中部地区：前原高校

南部地区：糸満高校、首里高校

（優勝は前原高校）

米軍統治下にあった沖縄は比較的早く野球が娯楽のひとつとして復活し、上記のように1946年9月に未だ戦争の傷跡が生々しく残る中、第1回全島高等学校野球大会を開催。1952年には石川高校を全国大会予選となる南九州大会に派遣。しかし実力差は大きく九州予選で敗退を繰り返す。県勢の初出場は一県一校制度を導入した1958年の第40回記念大会の首里高校まで待つこととなる。

<戦後、沖縄高校野球のあゆみ その2>

『沖縄県高校野球五十年史』より抜粋

1949年 県立二中跡（現：那覇高）に城岳球場を建設

第4回全島高校野球大会 優勝は前原高校

1950年 第5回全島高校野球大会 優勝は那覇高校

1951年 第6回全島高校野球大会 優勝は石川高校

1952年 第7回全島高校野球大会 優勝は石川高校

第34回全国高校野球東九州第二次予選に12年ぶり（戦後初）石川高校が出場

●鹿児島高校に1－5で惨敗

1953年 「沖縄県高等学校体育連盟」が結成

大会主催が文教部から高体連主催になる
第35回大会東九州予選

●石川 0－7 別府鶴見丘

1954年 第36回大会東九州予選

●那覇 0－10 大分商

※同年12月

那覇高校球場に鉄骨バックネット及び1500人収容のスタンド完成（工費15000B円）

1955年 第37回大会東九州予選

●コザ 0－7 鹿児島商

主催者の朝日新聞及び米軍からも許可をもらい52年に戦後初出場した石川高校の様子が『五十年史』に掲載されている。当時の石川高校を引率した久場長哲氏の「最初の九州遠征の思い出」である。「当

時の石川市民の熱狂ぶりは筆舌に尽くし難いものがあった。資金を集めるのに劇場で芝居をやり、そこで選手の紹介などが行われ壮行には万人が沿道一ぱいに埋め尽くし盛んな声援を送っていた。選手は自家用車でパレードしながら那覇港に向かった。戦後初めての遠征とあっては胸のおどりはおさえようがなかったであろう」とある。また開会式で掲揚された「日の丸」「君が代」に祖国復帰の切なる願いが実現したように感激している。一方で、野球道具を鹿児島で調達したことや新品のスパイクによってマメができたこと、米製のカーキー服布地で作ったユニフォームがプロ野球のようなスタイルで九州では批判を受けたことなども記されている。

九州予選に参加するようになったものの、その実力差は点差が証明している。県内では外野フェンスや投手マウンドの無い野球場を使い、試合も7回までという大会規定だった。九州で初めて野球場で9回まで試合するという状態であり、特に試合終盤になると点差が開くという結果につながっていた。戦前と同様、戦後も厚い九州の壁に跳ね返されたのである。

沖縄高等学校野球連盟の発足に向けて具体的に動き出すのは1955（昭和30）年のことである。同年12月に沖縄高体連並びに野球連盟共催で九州の名門校、鹿児島商業高校を招聘。これを機に日本高等学校野球連盟の佐伯達夫氏、九州支部幹事の黒田登志晴氏らが来沖した。その際に国場氏や高体連会長の阿波根直成氏など沖縄の指導者5人と懇談会を開き、沖縄高野連結成の必要性を話し合った。¹¹⁾

翌56（昭和31）年2月1日に設立総会を行い、資金面では社会人野球が有料試合を行い、その収入（B円で1万円）を設立基金にあてた。佐伯氏の「沖縄を見捨てるわけにはいかん」という想いと沖縄側の甲子園に選手を送り出すという熱意が繋がったのである。

<戦後、沖縄高校野球のあゆみ その3>

1956年 第38回大会 東九州予選

●那覇2－3中津東（大分）

1957年 第39回大会 東九州予選

●那覇商0－10大宮（宮崎）

- 1958年 第40回大会 首里高校初出場
 1959年 第41回大会 南九州予選
 ●中部農林 1 - 1 0 高鍋 (宮崎)
 1960年 第42回大会 南九州予選
 ●沖繩工業 0 - 1 6 宮崎大淀
 ※奥武山球場完成 建設費用約25万ドル
 1961年 第43回大会 南九州予選
 ●首里 7 - 8 高鍋 (宮崎)
 1962年 第44回大会 南九州予選
 ○沖繩 4 - 2 宮崎大淀
 安仁屋宗八投手を擁して初の自力出場
 1963年 第45回大会 首里高校 全国大会初勝利
 1964年 第46回大会 南九州予選
 ●沖繩 4 - 1 0 宮崎商業
 1965年 第47回大会 南九州予選
 ●首里 0 - 2 高鍋 (宮崎)
 1966年 第48回大会 南九州予選
 ○興南 7 - 5 大宮 (宮崎)
 1967年 第49回大会 南九州予選
 ●興南 0 - 3 大宮 (宮崎)
 1968年 第50回大会 興南高校 ベスト 4 進出
 1969年 第51回大会 南九州予選
 ●首里 0 - 6 宮崎商業
 1970年 第52回大会 南九州予選
 ●小禄 0 - 3 都城 (宮崎)
 1971年 第53回大会 南九州予選
 ●普天間 0 - 1 都城農業 (宮崎)
 1972年 第54回大会 南九州予選
 ○名護 1 - 0 高鍋 (宮崎)
 ※本土復帰の年に自力で出場を決めた。
 1973年 第55回大会 前原高校出場
 1974年 第56回大会 南九州大会
 ○石川 3 - 2 高鍋 (宮崎)
 ●豊見城 0 - 3 延岡 (宮崎)
 ●石川 0 - 3 延岡
 ※この年を最後に二次予選となっていた南九州大会
 が無くなり、九州は一県一校となる。
 ※○は勝 ●は敗

5. 全国高等学校野球選手権大会初出場へ

沖繩高野連が設立し、高校野球も九州や全国大会をめぐって切磋琢磨していく時代になるが、何度も

九州の厚い壁に跳ね返されている。56年から71年までの16年間で自力出場したのは、わずか2回である。

沖繩県勢として初めて甲子園の土を踏んだのは1958(昭和33)年の第40回記念大会である。佐伯達夫高野連副会長の「鶴の一声」で、記念大会は一県一校となり、沖繩県の代表校も甲子園に招待されることになった。初出場したのは県予選を勝ち抜いた首里高校だった。

同年7月29日、選手らは、保護者や友人、学校関係者ら数千人に見送られ、沖繩丸で那覇の泊港を出港。途中、徳之島では小舟に乗った島民から激励を受けつつ、24時間以上の船旅を経て鹿児島に到着した。鹿児島の鴨池球場で本格的な野球場を使った練習を行っている。電車で甲子園に向かい、第40回全国高等学校選手権大会は8月8日、仲宗根弘主将の選手宣誓で幕を開けた。試合は、大会2日目の9日、福井県代表の敦賀高校と対戦。残念ながら0-3で敗北する。左翼手で出場した山口辰次氏は「金縛りにあったみたい。必要以上にいろいろ考えすぎて、体が全然動かなかった」「キャッチボールでは、隣の外野手にボールが届くだろうかと思うほど、球場が大きく感じた」と話す。また三塁手で2番打者だった金城睦俊氏は「マウンドから投げってくる投手と対戦するのは初めてで、大きく上から投げおろしてくるようだった」と語った。¹²⁾

敗戦後、甲子園の土をバッグに詰め込み、帰沖した際に、選手が持ち帰った土を海中に捨てた話は有名である。当時の沖繩はまだ米軍の統治下にあり、沖繩にとって日本は「外国」扱いだった。首里高校の選手もパスポートを持って甲子園に参加していた時代である。沖繩に戻る際に植物検疫があり、外国から土を持ち込むことは違反する行為だったのである。

捨てられた甲子園の土は、全国でも大きな議論を巻き起こした。31日付の朝日新聞はトップで報じ、九州朝日放送(KBC)もニュースで取り上げた。同情の声が寄せられ、学校や選手たちには甲子園の小石や土で焼かれた皿が送られた。寄贈を計画した大阪在住で、日本航空キャビンアテンダントの近藤充子さんは当時「悲しいやらくやしいやらでじっとしておれません。できるなら甲子園の砂利を首里高ナインへ送りたい」と語っている。山口は、送られ



写真5 甲子園の皿（個人蔵）

た皿を今も大切に保管する¹³⁾ (写真5)

ところで初出場した首里高校は、県予選の準決勝で糸満高校を倒している。その糸満高校の選手に裁弘義がいた。後に監督として豊見城高校や沖縄水産高校を率いて甲子園出場を果たしている。裁氏は高校卒業後に、愛知県の中京大学に進学。本土の強豪校の練習を目の当たりにした。そして1964（昭和39）年、東京オリンピックに乗じて東海道新幹線が敷かれたとき、学生だった裁氏はショックを受けた。「沖縄はこれでまた勝てないと思った。昼、授業を終え、午後名古屋から広島へ行って十分試合ができる時代になったんです。でも沖縄は一生離島。指導者がうんと勉強せねばいけないと、自分に言い聞かせたものです」。¹⁴⁾

野球場などの施設、道具、取り巻く社会環境など様々な面で沖縄と本土との差を象徴するかのような野球の実力差も大きく開きがあったといえる。

6. 沖縄代表校の活躍

沖縄の代表校が、大きく活躍したのは1968（昭和43）年の第50回大会の時である。我喜屋優主将らの興南高校がベスト4に進出した。いわゆる「興南旋風」である。1回戦で岡谷工（長野県）を5－3で倒す。1963年（昭和38）首里高校の初勝利以来、5年ぶりの全国大会の勝利に県民は沸いた。1968年8月10日付沖縄タイムスでは「よくやったぞ！興南ナイン テレビに盛んな声援 国際通り人通りも途絶える」という見出しに「試合中の約二時間というもの全琉をテレビとラジオにくぎづけにし、熱戦のルツボにまきこんだ」と報道している。興南高校

の瀬長監督は「（相手投手に）シャットアウトされるのではないかと思ったが勝った。大穴ですね。二回戦はおまけのつもりでのびのびとぶつかっていきたい」と謙虚に答えている。一方で岡谷工業の丸山監督は「甲子園をあまくみすぎた」という敗戦の弁を述べている。2回戦は岐阜南高校に8－5で逆転勝ちを収める。瀬長監督は「二勝したのだから、これからは欲を出して三、四勝をネライます。」と決意を新たにしてしている点がおもしろい。3回戦を突破した際には「涙うかべ総立ち」（8月19日付沖縄タイムス）するアルプススタンド応援団の様子が報じられた。続く4回戦（準々決勝）で盛岡一高を10－4で下しベスト4に進出。日本高野連の佐伯氏は「今から15年前の沖縄の高校野球は草野球のようなものであったが、たくましい成長をみせた。本土の一流チームに遜色のない力を身につけることができ、まことに喜ばしい」（8月21日付沖縄タイムス）とコメントした。同日の紙面では「全沖縄に“興南台風”」「国際通りガラあき“闘志”に島ぐるみの応援」「商売そっちのけ 那覇商店街」「官公庁の窓口業務も一時ストップ」「田んぼに携帯ラジオ持ち出す 名護」「映画を無料でサービス 宮古」「さっそく祝電打つ 八重山」など各地の熱狂ぶりを伝えている。さらに当時の沖縄を統治していた琉球列島米国民政府のアンガー高等弁務官が興南高校ナインに激励電報を打っており、その内容が興味深い。「全国高校野球の優勝をめざす興南チームの大健闘は全住民とともにわれわれ在沖米人にとっても大いなる誇りである。輝かしい闘魂あふれるスポーツマンシップにわれわれの心からの希望と祝福を送る」とある。1968年は、主席公選が行われた年であり、沖縄の祖国復帰や自治権拡大、軍用地や基地撤去などの運動が特に活発なときであった。このような時期に、興南高校の活躍に熱狂する県民に米国民政府も寄り添うようなメッセージを送ることは統治者にとって重要なことであったと考えられる。一方でベスト4進出時の新聞に世相を反映した「自力でかちとるのだ」という記事がある。「祖国から分離されて二十四年、日本国民として差別の中に生きてきた沖縄の息子たちも本土の同胞を打ち負かすまでにたくましく成長した。『沖縄は自らかえる』—これは祖国復帰要求県民大会における高校生のたちのス

ローガンのひとつだったが、興南ナインも自らの力で堂々と全国民の前に沖縄健児の自信と誇りを示した。」とあり、復帰悲願の県民に好刺激を与えたことを強調している。¹⁵⁾

7. 裁弘義について

興南高校のベスト4進出以降、沖縄代表のチームが九州や全国大会で活躍する姿が多々みられるようになる。沖縄の本土復帰となった1972（昭和47）年第54回大会に名護高校が自力で出場。復帰記念の沖縄国際海洋博覧会が開催された1975（昭和50）年第57回大会では石川高校が2回戦まで進出した。

そして、沖縄は強くなったと印象付けたのが58回大会から3年連続ベスト8に進出した豊見城高校の活躍である。豊見城高校を率いたのは裁弘義氏であり、県民の期待を背負っていた人物といっても過言ではない。

裁氏は41（昭和16）年5月11日糸満市に生まれた。糸満高校から中京大学体育学部に進学。卒業後は小禄高校で野球部監督に就任。その後、豊見城高校で春夏合わせて7回、沖縄水産高校で12回の甲子園出場チームを育てた。1990（平成2）年、91（平成3）年の夏には沖水を2年連続全国準優勝に導いている。甲子園通算29勝、勝率は6割を超える。

裁監督という名前は、沖縄県民や高校野球ファンなら誰でも知っている有名な名監督の一人であろう。沖縄及び高校野球の歴史をつくったといえる存在であり、本土と遠く離れた沖縄の野球をいかに全国レベルに引き上げ、強いチームをつくるかということに情熱を注いだ監督であった。オフシーズンに入る前の11月に開催する1年生大会やオフシーズン中の1月に遠投や100m走など選手個々の体力を競う県内各校対抗競技大会の実施など様々な取り組みも発案している。

裁氏は、豊見城高時代に7回甲子園に出場して、うち四度ベスト8に進出した。裁氏が率いた豊見城高校で野球部部長を務めた宜野座嗣郎氏は、同校が強くなった理由に「一番大切なことは練習です」と指摘し、練習を支える用具と施設を充実させることや科学的トレーニングの必要性を説いている。さらに沖縄勢の活躍の背景に「祖国復帰という目には見えないけれども高校生の成長とどうしても切りはな

せないことがありました。」と述べ、本土復帰という壁を乗り越え「本土並み」を目指し成長する沖縄の姿があることを述べている。さらに続けて「祖国復帰をしたことによって野球部員も精神的・心理的の面において他府県の高校生と並んだということです。何度も九州大会や甲子園大会に参加して、選手は入れかわるが、精神的に心理的に対等の情態にあることを、ベンチに座っていてひしひしと感じました。むしろ、他府県の選手以上に心理的・精神的に優位なほどおちついてきたことも多々ありました」¹⁶⁾と証言している。

祖国復帰により、精神的な距離感が薄れてきたことや県外チームとの交流により、対戦相手の実力を知り、それを越える練習を重ね、力をつけたというのである。

しかし、豊見城高校時代に裁氏は準々決勝の壁を破ることができなかった。終盤までリードしながらも逆転負けやサヨナラ負けという試合があり、ベスト8の壁を感じたはずである。沖縄水産に転じた後も毎年のように甲子園出場を続けた。そしてベスト8の壁を破ったのは、88年夏のことである。エース平良幸一を擁して、準々決勝を逆転サヨナラ勝ちで通過し、同校としてははじめて、沖縄県勢としても20年ぶり2回目の準決勝に駒を進めた。それから2年後の1990（平成2）年夏、沖縄県チームは初めて甲子園の決勝戦を戦うこととなる。¹⁷⁾

当時の裁氏の手書きノートが残っている。ノートは90年と91年夏のものでB5判6冊。2年連続で夏の全国高等学校野球選手権大会準優勝を飾り、甲子園を沸かせた時のものである。（写真6）

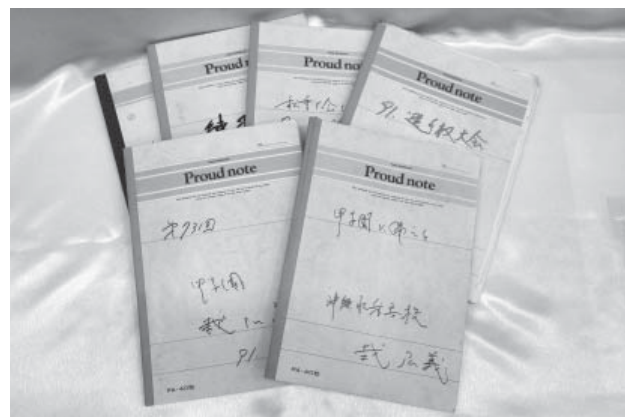


写真6 裁ノート 集合（個人蔵）

県予選の準決勝と決勝、甲子園の全国大会1回戦から決勝戦まで、相手チームの分析や沖水選手の様子も書き込んでいる。沖繩水産高野球部の部長として裁氏と7年間を過ごした當銘和夫氏は「さっと尻のポケットから取り出し、大きな文字でババッと書いていた」（2018年5月13日付沖繩タイムス）と話す。厳しい指導で勝負にこだわった裁氏であるが、ノートの中には「同じ少年、皆弱いんだ」「笑ってやろう」「皆、いい顔している」など選手を励ます言葉が目立つ。90年の準優勝時に1番打者だった新里紹也氏は「一人一人をきちんと観察していたからこそ、毎年全国で成績を残せたと思う。継続して勝つことは本当に難しかったと思う」（2018年5月12日付琉球新報）と懐かしむ。ノートには冷静な分析も記録されており、時には「相手はひるんだ」「勝利は我等にある」という試合の流れを読んだ表現も印象的だ。試合中にリアルタイムで記録することで、冷静に試合を見つめる状態をつくっていたと思われる。記録するもう一人の自分が試合の流れを読み、選手の動きを観察することで的確に判断し、見事な采配につながったといえるだろう。（写真7）

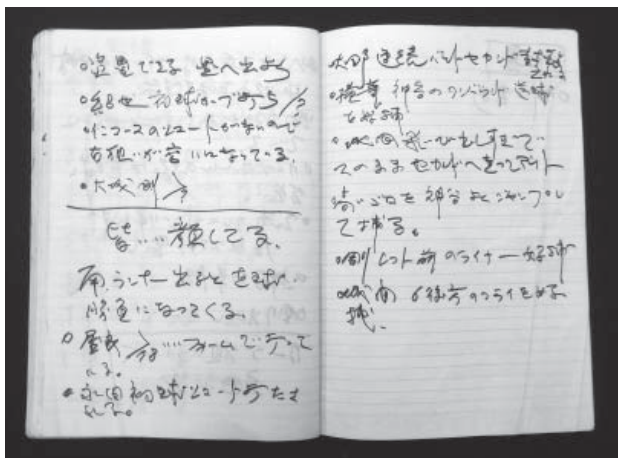


写真7 ノートの中身（個人蔵）

8. 高校野球の活躍と沖繩県民

沖繩水産高校の2年連続準優勝に、県民は大いに熱狂した。1990年8月22日付沖繩タイムスは、紙面のほとんどを高校野球にさいた。全32面中、14面が沖繩水産高校の活躍に関する内容である。同じ頃、第1回世界のウチナンチュ大会を前日に控えていたにもかかわらず、試合の内容や選手の声、県内各地の様子を伝える報道が大半であったことが、

反響の大きさを物語っている。作家であり元県立博物館館長の大城立裕氏は「九回裏に逆転負けするケースがよく見られたが、そういうツメの甘さがなくなった。（中略）全員がのびのびとプレーしていたが、これなどは政治といわず経済といわず、よろず負けてばかりいた沖繩が上げ潮の情態にあることを裏付けるものだ。」と話している。また高良倉吉（当時は浦添市立図書館）氏は「従来のチームにあった気負いや『やらねばならない』という気持ちではなく、試合で練習の成果を楽しんでいるみたいだった。（中略）全国ブランドとしての力は十分証明したと思う。今までのように積み重ねれば向こうから優勝が転がってくる。実に満足すべき時代になってきた。」と評価した。さらにミュージシャンの喜屋武マリー氏は「これまで沖繩の人が持っていた『本土に出ると力を十分に発揮できない』という“殻”を打ち破ることになると思う」と語った。¹⁸⁾

実は、この年の選手の大半が1972（昭和47）年生まれであり、それは沖繩が日本復帰を果たした年である。いわゆる「復帰っ子」世代の選手たちは、甲子園という大舞台で堂々とプレーし、輝かしい実績を残した。その「本土並み」を越えた活躍に、戦争や米軍統治下を経験した県民はおおいに励まされたのである。

その後の沖繩は、全国トップレベルの高校野球強豪県としての地位を確立する。浦添商業が2度のベスト4進出、地方の宜野座高や八重山商工なども全国大会で活躍した。また裁氏の教え子である金城孝夫氏が監督に就任した沖繩尚学は1999（平成11）年の第71回選抜大会で初優勝を果たす。2008（平成20）年の第80回選抜大会では、金城氏の教え子であり初優勝時の投手であった比嘉公也氏が監督として2度目の優勝を飾る。そして2010（平成22）年には興南高校が全国大会で春夏連覇を達成。監督は、1968年「興南旋風」時の主将である我喜屋優氏である。

甲子園出場の道は遠く険しいものであった。戦争で焦土と化し、野球用具どころか食料や衣料もなく、あらゆる面で日本本土に遅れをとっていたことは明らかである。戦後は政治上・行政上、本土から分離されてアメリカの施政下におかれ、日本の主権の及ばない地域となり、外国同然の取り扱いを受け、精

神的に疎外感を招く原因になっていたことも見逃せない。一方で、日本本土は、高度経済成長を遂げた。こうした落差を埋めたのが、高校野球だったといえるであろう。政治的断絶や地理的な距離を乗り越え、戦後復興と重ね合わせるように沖縄の高校野球は強くなり、とうとう全国制覇を成し遂げる。高校野球を通して県民はサクセスストーリーを経験した。それは日本復帰、ドルから円の通貨交換、730道路通行方式の変更、国際海洋博覧会などと同様に多くの県民が共通して体験した出来事であった。

2010年興南高校優勝時に編集者の新城和博氏は「沖縄中が家族になったような感じだった。」¹⁹⁾と話す。地理的な距離や歴史的差異を乗り越えた高校野球で活躍した選手達は、高校生であり、息子であり、親戚であり、クラスメートや地域の子どもたちであったことが身近な歴史の一コマにつながったのである。

9. おわりに

歴史分門展示室トピック展「熱闘 高校野球 本気の夏100回目」を開催するにあたり、沖縄県高校野球連盟、朝日新聞社那覇総局、沖縄タイムス、琉球朝日放送をはじめ、琉球新報、NHK沖縄放送局、琉球放送、FM沖縄など県内マスコミ各社や多くの関係者から支援や協力をいただいた。特に甲子園出場歴のある16の高校や野球部の監督、元高校球児やマネージャーなど、貴重な資料も出展させていただいた。記して感謝申し上げます。

参考文献

- 1)2) 沖縄県高等学校野球連盟『沖縄県高校野球五十年史』(1972年)
- 3) 市田実『海のかなたの甲子園』双葉社(2010年)
- 4)6) 国場幸輝「沖縄野球の歩み」沖縄タイムス紙(1978年1月10日～2月25日 34回連載)
- 5) 8)沖縄タイムス「強い沖縄野球 この人から」(2011年8月26日付)
- 7)10) 琉球新報運動部編『沖縄野球100年』琉球新報社(1995年)
- 9) 沖縄県高等学校野球連盟『沖縄県高校野球五十年史』(1972年)
- 11) 沖縄県高等学校野球連盟『沖縄県高等学校野球史第Ⅱ巻(昭和47年～昭和60年)』(1987年)
- 12) 沖縄県立博物館・美術館において山口辰次氏・金城睦俊氏に2018年5月9日に聴取調査
- 13) 沖縄タイムス連載「球児たちの1世紀夏の甲子園100回」(2018年5月4日付)
- 14) 藤井利香『監督と甲子園』日刊スポーツ出版社(2003年)
- 15) 沖縄タイムス「自力でかちとるのだ」(1968年8月21日付)
- 16) 15周年記念誌編集委員会『創立15周年記念誌』沖縄県立豊見城高等学校(1981年)
- 17) 森岡浩『高校野球 熱闘の100年 甲子園の怪物たち』角川新書(2015年)
- 18) 沖縄タイムス「沖水の健闘たたえる」(1990年8月22日付)
- 19) 新城和博『ぼくの沖縄<復帰後>史』ボーダー新書(2014年)

H30年度歴史部門展示「野球展」一覧

番号	資料名	年代	提供者/所蔵機関
1	奥武山航空写真	1945年6月	沖縄県公文書館
2	潟原（かたばる）と塩田写真	1940年頃	那覇市歴史博物館
3	島田杯トロフィー	1964年	県高野連
4	島田顕と東大野球部員集合写真1	1922（大正11）年	島守の会
5	島田顕と東大野球部員集合写真2	1923（大正12）年	島守の会
6	島田顕氏実績顕彰会より沖縄高等学校野球連盟会に贈られた「島田杯トロフィー」と目録	昭和59年8月15日	県高野連
7	飛田徳州直筆「野球者無私道也」（掛軸1）	1952年	個人蔵
8	飛田徳州直筆「一球常善」（掛軸2）	1930～52年	個人蔵
9	ミズノグローブ1	昭和初期	個人蔵
10	ローリングス グローブ2	1940年頃	個人蔵
11	週間朝日 3冊 第45回 第46回 第47回大会	1960年代	県高野連
12	写真1「630部隊野球チーム」	1946年頃	個人蔵
13	写真2「630部隊野球チーム」	1946年頃	個人蔵
14	写真3「那覇高校グラウンド」	1955年頃	個人蔵
15	写真4「那覇高校グラウンド」	1955年頃	個人蔵
16	アメリカ製バット1 970グラム	1950年	個人蔵
17	ローリングス製グローブ「ビルダーク」	1920年頃	個人蔵
18	ローリングス製グローブ「スリーフィンガー」	1948年頃	個人蔵
19	ウィルソン製グローブ「2フィンガーグラブ」	1950～55年	個人蔵
20	全国高等学校野球連盟副会長・佐伯達夫氏より那覇高等学校二年生・国古真一宛て「選抜高等学校野球大会への招待状」（複製）	1958年（昭和33）1月28日	個人蔵
21	歓迎を受ける沖縄代表野球部員（写真）	1958年（昭和33）	県高野連
22	第40回全国高等学校野球選手権記念大会出場記念（アルバム1）	1958年（昭和33）	首里高等学校
23	第40回全国高等学校野球選手権記念大会出場記念（アルバム2）	1958年（昭和33）	首里高等学校
24	第40回全国高等学校野球選手権大会出場記念ボール 2個	1958年（昭和33）	首里高等学校
25	甲子園の土で造った記念の皿	1958年（昭和33）	首里高等学校
26	首里高等学校野球部員の第40回甲子園出場記念「日の丸」の寄せ書き	1958年（昭和33）	首里高等学校
27	台風のため2日延期し、やっと出航した「沖縄丸」（写真）	1958年（昭和33）	首里高等学校
28	鹿児島県代表の天竜高校と一緒に激励を受け鹿児島駅を出発する（写真）	1958年（昭和33）	首里高等学校
29	開会式の予行演習を見学する国場理事長と石川沖野連会長（写真）	1958年（昭和33）	首里高等学校
30	試合終了後、選手を労う応援席（写真）	1958年（昭和33）	首里高等学校
31	鹿児島港で税関で荷物の点検を待つ選手たち（写真）	1958年（昭和33）	首里高等学校
32	開聞岳から桜島を望む（写真）	1958年（昭和33）	首里高等学校
33	初代沖縄大会優勝旗（緑）甲子園派遣旗	1950年代	県高野連
34	2代目沖縄大会優勝旗（赤）	1950年代	県高野連
35	写真1 興南旋風 ベンチ前の素振り	1968年（昭和43）	沖縄タイムス
36	写真2 興南旋風 安次嶺投手を祝福	1968年（昭和43）	沖縄タイムス
37	写真3 興南旋風 アルプススタンド エイサー	1968年（昭和43）	沖縄タイムス
38	写真4 興南旋風 アルプススタンド 松岡主席	1968年（昭和43）	沖縄タイムス
39	興南準決勝進出記念プレート（高等弁務官より）	1968年（昭和43）	興南高校
40	琉米親善野球大会トロフィー	1967年（昭和42）	興南高校
41	琉米親善野球大会トロフィー（漆器）2点	1957年（昭和32）	石川高校
42	第44回全国選手権大会 安仁屋投手（写真）	昭和37年8月13日	県高野連
43	第44回全国選手権大会 広陵対沖縄（写真）	昭和37年8月13日	県高野連
44	第45回全国選手権大会沖縄予選 首里高校（写真）	昭和38年7月13日	県高野連
45	第71回全国高等学校野球選手権大会出場記念の皿	平成元年7月23日	石川高校
46	名護高校（写真）	1972年7月27日	沖縄タイムス社
47	首里高校（写真）	1963年8月13日	沖縄タイムス社
48	石川高校（写真）	1975年7月29日	沖縄タイムス社
49	豊見城高校（写真）	1976年8月14日	沖縄タイムス社
50	中部工業高校（写真）	1979年7月22日	沖縄タイムス社
51	沖縄水産高校（写真）	1991年8月21日	沖縄タイムス社
52	那覇商業高校（写真）	1994年7月17日	沖縄タイムス社
53	前原高校（写真）	1996年7月21日	沖縄タイムス社
54	那覇高校（写真）	2000年8月14日	沖縄タイムス社
55	宜野座高校（写真）	2001年7月22日	沖縄タイムス社
56	中部商業高校（写真）	2004年7月18日	沖縄タイムス社
57	八重山商工高校（写真）	2006年8月13日	沖縄タイムス社

番号	資料名	年代	提供者/所蔵機関
58	浦添商業高校 (写真)	2008年8月4日	沖縄タイムス社
59	糸満高校 (写真)	2011年7月17日	沖縄タイムス社
60	嘉手納高校 (写真)	2016年7月17日	沖縄タイムス社
61	首里高等学校ユニフォーム		個人蔵
62	興南高等学校ユニフォーム		個人蔵
63	石川高等学校ユニフォーム		個人蔵
64	浦添商業高等学校ユニフォーム		個人蔵
65	豊見城高等学校ユニフォーム		個人蔵
66	那覇商業高等学校ユニフォーム		個人蔵
67	中部商業高等学校ユニフォーム		個人蔵
68	那覇高等学校ユニフォーム		個人蔵
69	嘉手納高等学校ユニフォーム		個人蔵
70	糸満高等学校ユニフォーム		個人蔵
71	中部商業高等学校ユニフォーム		個人蔵
72	前原高等学校ユニフォーム		個人蔵
73	準優勝応援の記念太鼓 (表部分)	1990年 (平成2)	沖縄水産高等学校
74	第72回全国高等学校野球選手権大会「準優勝」(盾)	1990年 (平成2)	沖縄水産高等学校
75	第73回全国高等学校野球選手権大会「準優勝」(盾)	1991年 (平成3)	沖縄水産高等学校
76	写真1 第72回大会 閉会式	1990年 (平成2)	沖縄水産高等学校
77	写真2 閉会式を終えて甲子園球場を一周	1990年 (平成2)	沖縄水産高等学校
78	写真3 勝利の瞬間 神谷投手を中心に	1990年 (平成2)	沖縄水産高等学校
79	写真4 沖水逆転 八幡商戦8回に逆転!	1990年 (平成2)	沖縄水産高等学校
80	写真5 沖水 バント戦法	1990年 (平成2)	沖縄水産高等学校
81	写真6 沖水 決勝戦 9回裏大城剛二塁打	1990年 (平成2)	沖縄水産高等学校
82	写真7 沖水 アルプススタンド1	1990年 (平成2)	沖縄水産高等学校
83	写真8 沖水 アルプススタンド2	1990年 (平成2)	沖縄水産高等学校
84	写真9 沖水 応援団のマーク	1991年 (平成3)	沖縄水産高等学校
85	写真10 沖水 大野倫投手 鹿実を倒して決勝進出	1991年 (平成3)	沖縄水産高等学校
86	写真11 沖水 2年連続準優勝 スタンドに挨拶	1991年 (平成3)	沖縄水産高等学校
87	写真12 沖水 裁監督がベンチ前で選手を迎える	1990年 (平成2)	沖縄水産高等学校
88	裁義弘監督のノート 6冊	1990年～1991年	個人蔵
89	沖縄水産高等学校ユニフォームと帽子		個人蔵
90	沖水 「大胆細心」裁監督自筆Tシャツ		個人蔵
91	宜野座高等学校ユニフォーム	2001年 (平成13)	個人蔵
92	宜野座高校 「自立と自律」文集 2冊	2001年～2003年	個人蔵
93	八重山商業高等学校ユニフォーム	2006年 (平成18)	個人蔵
94	八重山商工 金城長靖氏が決勝戦でHRを打ったバット	2006年 (平成18)	個人蔵
95	浦添商業 ユニフォームとデータ表		個人蔵
96	北城ろう学校ユニフォームと帽子		個人蔵
97	北城ろう野球部 高野連加入記念ボール	1981年9月30日	個人蔵
98	第71回選抜高等学校野球大会「優勝旗」(複製)	1999年	沖縄尚学高等学校
99	第80回選抜高等学校野球大会「優勝旗」(複製)	2008年	沖縄尚学高等学校
100	沖縄尚学高等学校 (写真)	2014年8月20日	沖縄タイムス社
101	「県民栄誉賞」(賞状)	1999年4月19日	沖縄尚学院高等学校
102	小淵恵三日本内閣総理大臣より贈られた「一球入魂」の色紙	1999年	沖縄尚学院高等学校
103	野中官房長官からの記念トロフィー	1999年	沖縄尚学院高等学校
104	第44回明治神宮野球大会優勝盾	2013年	沖縄尚学院高等学校
105	第82回選抜高等学校野球大会「優勝旗」(複製)	2010年	興南高等学校
106	第92回全国高等学校野球選手権大会「優勝旗」(複製)	2010年	興南高等学校
107	興南高校 (写真)	2010年8月21日	沖縄タイムス社
108	「県民栄誉賞」(賞状)	2010年9月13日	興南高等学校
109	春夏甲子園大会 優勝メダル	2010年	興南高等学校
110	「興南、春夏連覇」(号外新聞)	2010年8月21日	沖縄タイムス社
111	興南 春夏連覇達成に関連する新聞記事	2010年8月21日	沖縄タイムス社
112	映像 「高校野球名場面集」	2010～2017年	琉球朝日放送
113	映像 「名監督列伝」		琉球朝日放送
114	映像 ドキュメント「壁を越えて」(北城ろう学校)		琉球朝日放送